

平成十六年「陸」新年句会報

小森谷正枝記

二月十四日、プレスセンターにおいて、参加者六十一名により「陸」新年句会及び懇親会が行われた。

主宰挨拶

明けましておめでとうございます。最近、背が少し伸びたり、奥歯が一本生えたりして、まだ成長をつづけているのですが、これも「陸」の成長の予兆と考えるとありがたいことだなと思っております。皆さまも角でも歯でも一本生やしてがんばってください。

私は楸邨の「芭蕉全句集」を愛読しておりますが、その中に人口に膾炙している句ではないのですが「櫓の声波を打つて腸氷る夜や涙」という談林から蕉風へ変わる芭蕉の若い頃のある苦しみが現われている句があります。この句によって芭蕉が自分に近づき、私自身の基本に置いている句であります。

ある同人誌に国文学者の山下一海さんが「蠟燭と芭蕉」という短い文を書いておられるのを読みました。ある時、

芭蕉が、ある裕福な家でご馳走になり、蠟燭の灯の下で晚餐をとり食事が終わったその時に、蠟燭の灯を消してくれと主に頼みました。その頃、蠟燭は高価なものでした。消してくれと頼んだことは、もったいないと思ったのではない。蠟燭が刻々と減ってゆくその時間の流れが残酷にそこに現われていると感じたのです。時間という目に見えないものが蠟燭が減ってゆく様子で見え得る形でそこに凝縮して見えてくる。俳階という見えないものを見る映像の形で感じたひとつの芭蕉の境地の現われとみる事ができると思います。それまでは事柄を滑稽にいう談林が俳句であった。この時期になって、俳諧は映像によって内面をどう論理的、かつ直感的に現わすかということを考えるようになる。表現そのものが俳諧であると、はつしと芭蕉は悟ったのです。映像そのものが俳諧である、可笑しみから俳句が芸術になった時であると思います。

こんなことも何かの参考になればと思います。小さな話

ですが挨拶の代わりにしたいと思います。

句会

一句評選者特選句

浅沼眞規子

心音の触れ合ふ近さ冬牡丹

稲村 茂樹

海鼠にも夜明けがありて片寄れる

北村 風居

小説の終りにつづく牡丹雪

遠山 弘子

鵜の岩の韜晦を入れ注連飾る

高田廣稲子

素粒子の不思議な動き雪しまく

東野 鷹志

封蠟は樺色二月十四日

橋田 勉

寒林をはみ出すものとして巢箱

町山 直由

寒林をはみ出すものとして巢箱

中村 仿湖

灯の色の凍る松本平かな

山本千代子

海鼠にも夜明けがありて片寄れる

小森谷正枝

主宰選評

天 貝寄風や砂に生木の立ててあり

柴田真知子

貝寄風のなまなましい実体感が感じられる。シンブルな光景、目的のない生木がさしてあるところに人間くささがあり、詩情がひびいてくる。

地 人日の月を見てゐる赤ん坊

山路 吹雪

人日の月が新鮮。冴えざえとした冬の月を本能的にじつと見ている赤ん坊を捉えた。

人 海鼠にも夜明けがありて片寄れる

小森谷正枝

「片寄れる」を発見している。やや壺にはまっている。

佳 起ちあがる駱駝の埃春隣

町山 直由

動きをよく見ている視点はよいが、埃と春はつきすぎる。

佳 冬ざれや富士山頂のレンズ雲

竹内 實昭

レンズ雲が明るい感じで何かを象徴している。大きな叙

景句。

佳 赤ん坊に花の重さの掛蒲団

織田 玲子

客観的にみている。花と赤ん坊はややつくか。

佳 豆腐載る小屋に樑吊つてあり

高田廣稲子

生活感が出て、きちつとできている。

佳 兜太談に力授かる春一番

淺沼眞規子

直截に言って、兜太だからよい。

佳 初雪や鯉は能装束で舞ふ

小竹ヒサ子

空中で能装束が舞っているような、ふっとそんな世界が見えてくる。

佳 風呼ぶは一本の杭浮寝鳥

古屋恵美子

一本の杭をクロースアップして、そこに風を見ている。

全体に固定されてしまっているところがある。

高得点句（除右）

心音の触れ合う近さ冬牡丹

松本 道宏

煮凝に目玉のひそむ実朝忌

遠山 弘子

お知らせ

このたび、陸同人の稲村茂樹氏が福島県現代俳句連盟の平成十五年度「曠野賞」を受賞いたしました。

選考委員 矢島渚男 宇多喜代子 正木ゆう子 長谷川 權

第五〇回 角川俳句賞

作品募集応募規定

●募集作品 未発表作品五〇句

*B4判四〇〇字詰原稿用紙を使用してください

（フープロの場合は、B4判無罫用紙）。

*原稿冒頭に作品の表題と作者名を明記してください。

*別紙に①表題 ②俳号・本名・生年月日・年齢・性別 ③郵便番号・住所・電話番号 ④略歴（俳歴・受賞歴・所属結社等）⑤職業を記して同封してください。

*原稿の訂正、返却には応じかねます。

●締切 平成十六年五月底

（当日消印有効）

●選考方法

編集部の子選を終了候補作品を無記名で印刷し、選考委員の合議により決定します。

●賞

記念品ならびに副賞三〇万円

●発表表

『俳句』平成十六年十一月号誌上

●送付先

〒一〇二・一八七七

東京都千代田区富士見二一三・三

角川書店「俳句」編集部

※封筒には必ず「角川俳句賞応募作品」と朱書きしてください。